

共生社会

—障害者理解を深める手段としてスポーツ体験の有効性—

尚美学園大学 江頭ゼミ

○小河 元征 小林 豊 塚原勇治

現在、小学校の総合学習の授業において障害者の福祉体験が行われています。その中には、車いすを使った事業や、視覚障害者に対する点字の授業などが行われています。その時に、近所の子供たち 10 人にこのような授業を受けて、障害者について理解ができましたか？と質問したところ。「全然わからない」「あまり面白くなかった」と言われました。

そこで、現在の教育方針に基づいて授業を行うよりもより効率的な授業体系があるのではないかと考えました。そこで、子供でも気軽にでき、なおかつ興味を持ってもらえるような体験学習はないかと考えたところ、障害者のスポーツ大会などで誰でも気軽にできるスポーツを探しました。そのスポーツは「ボッチャ」という競技です。

● ボッチャについての詳細

注 1) ボッチャは、ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障害者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目です。 ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ 6 球ずつのカラーボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競います。障害によりボールを投げることができなくても、勾配具（ランプス）を使い、自分の意思を介助者に伝えることができれば参加できます。

<資料・参考文献> (日本ボッチャ協会参照 <http://www.boccia.gr.jp/whats-boccia.html>)

● 調査方法

ボッチャを組み込んだ授業と通常の疑似体験授業との理解度を比較しどちらの理解度が深まったかを授業前と授業後にアンケートを取るという形で調査しました。

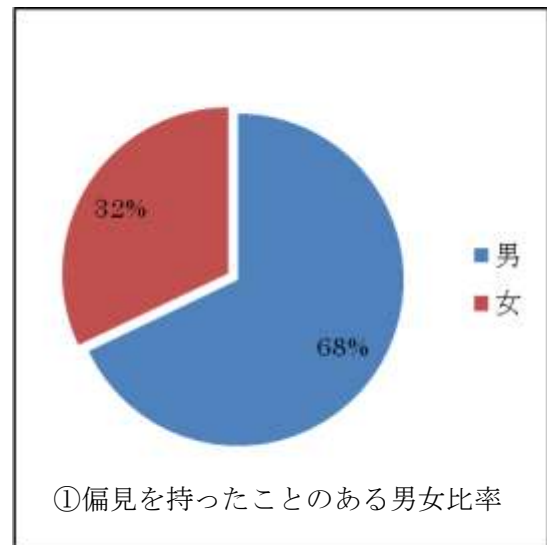
まず、1 年生 60 名に障害者スポーツ(北京パラリンピック)の映像を見せたのち、スポーツ体験を実施。本ゼミ 30 名に対し、障害者の分類などの説明、ならびに脳性マヒ障害者の映像を見せたあと、多数の学校が実施している視覚障害者の点字作成体験を体験してもらいました。

● 対象

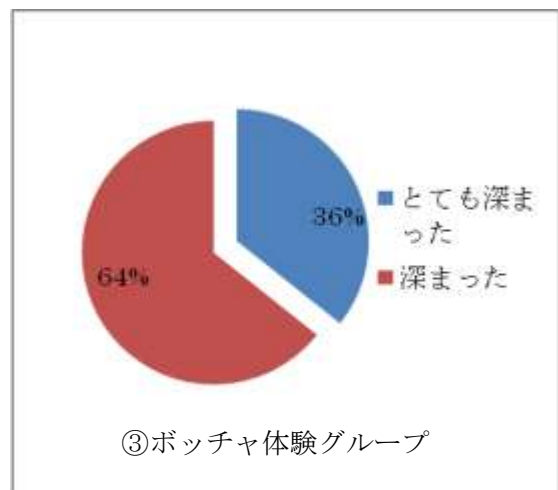
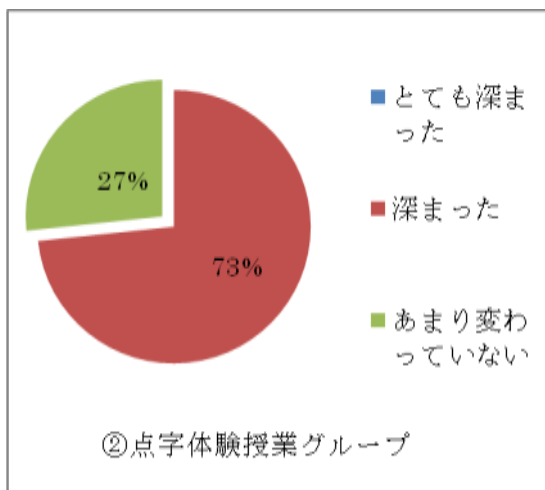
本大学一年生 60 名と本ゼミ生 30 名を本来の疑似体験授業を行うグループと障害者スポーツを取り入れた授業の前後にアンケートを実施し、体験前と後の理解度の変化を調査いたしました。

調査データ

- ① 全体の障害者に対して偏見を持ったことのある人の男女比率をアンケートから導き出し男性 68%・女性 32%となった。



- ②, ③のグラフは点字作成体験をしたグループとボッチャを体験したグループで、障害者に対する理解力の進展具合を数値化してグラフにしたものです。



●まとめ

今回我々が障害者スポーツについて、調査し取り組み、実際に健常者の方々に体験していただきました。障害者に対する差別や偏見はよく耳にする深刻な問題と言えます。こういった中で、簡単な講義や体験ではなく対象に合ったやりかたで、いかに障害者の気持ちになるかというのがとても重要なポイントになります。実際に体験していただきましてその結果、体験する前よりも、体験後のほうが障害者への関心が深まったという答えが出ました。体験者の方々は始め戸惑いもあったようですが、徐々にルールを理解していき真剣に取り組んでいただくことができました。初めての方でもわかりやすく、覚えやすいルールなため多くの方に興味を持っていただけたのではないかと手応えを感じています。